

# 香椎A遺跡2

—香椎A遺跡群第3次発掘調査概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第622集

2000

福岡市教育委員会

## 序

香椎A遺跡は、福岡市の東部の香椎平野に位置しています。香椎一帯は、福岡市の東の副都心として商店・住宅が集中している地域です。また、古代から仲哀天皇・神功皇后を祭神として祀る香椎宮が鎮座し、豊かな歴史をもつ地域でもあります。

香椎遺跡群は、香椎上遺跡で調査された「山城」や屋敷群を中心として展開する中世の拠点遺跡であり、このたび発掘調査を実施しました香椎A遺跡はその周辺に展開する集落遺跡であります。

本書は、この香椎A遺跡第3次調査の成果を報告するものです。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査にあたって、便宜をはかっていただいた香椎原三信病院の皆様をはじめ、多くの方々の御協力に対し、心から謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

## 例　言

- 本書は、東区香椎3丁目3番1号における病院増築工事に先立って、福岡市教育委員会が平成10年度（1998年度）に実施した香椎A遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
- 本書に使用した遺構実測図は本田・安藤峰正・伊藤健太・坂口剛毅・坂本真一・春田城二が作成した。また、製図には本田・今村佳子・鳥飼悦子があたった。
- 本書の遺物実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。
- 本書に使用した遺物実測図は本田・今村佳子が作成し、本田・鳥飼が製図した。  
なお遺物実測図の縮尺は土器類を1/3に統一し、石器を1/2で統一した。
- 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
- 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
- 本書で使用した写真は本田が撮影した。
- 本調査に関する記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定があるので、活用されたい。

遺跡調査番号	9821	遺　跡　省　略	KSA3
調　査　地　地　番	東区香椎3丁目3番1号	分　布　地　図　番　号	浜男17
開　発　面　積	967m <sup>2</sup>	調　査　面　積	493m <sup>2</sup>
調　査　期　間	1998年7月1日～1998年8月6日		

## 本文目次

第一章　はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
3. 遺跡の立地と環境	2
第二章　発掘の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	8
第三章　まとめ	17

# 第一章 はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

平成10年3月19日、医療法人原三信病院から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市東区香椎3丁目3番1号における病院施設増設工事予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は神功皇后を祭神として神龟元年(724年)に建立されたとされる香椎宮の北東に位置し、周知の遺跡である香椎A遺跡の範囲内に含まれていたため、埋蔵文化財課では平成10年4月30日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面から50cm程の赤褐色粘質土上面で古代から中世にかけての柱穴、土坑等の遺構群と該期の遺物を確認した。病棟増設工事では申請地内の大幅な地下げが予定されており、遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成10年7月1Hに着手し、同年8月6日に終了した。

## 2. 調査体制

調査委託	医療法人 原三信病院	理事長	原 三信		
調査主体	福岡市教育委員会 教育長		町田 英俊 西 意一郎（現任）		
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	柳田 純孝 山崎 純男（現任）		
	同	埋蔵文化財課 第2係長	山口 讓治 力武 卓治（現任）		
調査庶務	同	埋蔵文化財課 第1係 文化財整備課	河野 淳美 谷口 真由美（現任）		
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係	宮井 善朗 屋山 洋（試掘調査） 本田 浩二郎（本調査）		
調査作業	荒牧 幸子 岩崎 良隆 酒井 次憲 島本 初代 田上 智雄 夏秋 弘子 森山 恭助	荒牧 テルヲ 大瀬良 直哉 坂口 剛毅 芹野 謙藏 徳永 栄彦 二宮 白人 安田 光代	安藤 峰正 小川 秀雄 坂本 真一 園田 豊 堤 正子 吹春 哲男 本郷 満子	井上 英子 小野 千佳 佐藤 アイ子 田崎 アヤ子 永田 八重子 本郷 満子	伊藤 健太 近藤 澄江 篠崎 伝二郎 田中 フキ子 永田 律子 村田 敬子
整理作業	有島 美江	野副 けいこ	鳥飼 悅子	室 以佐子	

### 3. 遺跡の立地と環境

香椎A遺跡群は、福岡平野の東部に位置しており香椎丘陵を刻む小河川の谷底平野と海岸部の小冲積平野、砂丘性の小規模低地によって形成された香椎平野の南部分布している。この香椎平野は博多の北東約8kmに位置する狭い平野で、西を博多湾、南は多々良川と低丘陵、北と東を立花山を主峰とする山系に四方を囲まれている。第3次調査地点の東南方向約500mの地点には香椎丘陵が張り出しこの丘陵上に神龜元年（724年）の創建が伝えられる香椎宮が祀られている。この丘陵端部の北側には香椎川、南側から西側にかけては双又川が流れるが、両河川は香椎宮の西側で合流し、博多湾に流れ込む。香椎A遺跡群は、この合流地点から北側に400m、東側に600mの楕円形をなす遺跡範囲をもち、現在までに3次までの発掘調査が実施されている。第3次調査地点は遺跡範囲の北側に広がる丘陵の北側斜面に位置し、香椎遺跡群内でこれより北側の発掘調査はこれまで行われていない。

福岡市東区、特に福岡平野東部での発掘調査件数は、近年増加の傾向にあるが市内の他地域に比べ依然少ないので現状で、考古学的資料のみで歴史的環境を語るには時期が早いと言えよう。

旧石器時代・縄文時代の遺構については、香椎平野内での検出例は現在報告されていないが、この時期の遺物については香椎B遺跡群の調査において後期旧石器時代の石器、縄文時代早期・後期に位置づけられる石器・上器が出土している。この他に盾ノ原遺跡で細石刃、和白遺跡で三稜尖頭器の出土が報告されている。弥生時代の遺構・遺物についても、これまで香椎遺跡群においては検出例はなかったが香椎B遺跡群において、弥生時代中期から後期にかけての土器・石器が出土している。この時期の遺構・遺物の資料が他地域に比べ極端に少ないのは、単に発掘調査件数と発掘面積との関係であり、今後の資料の増加とこの時期の香椎平野の様相が解明されることに期待したい。

古墳時代になると名島古墳・香住ヶ丘古墳・天神森古墳・舞松原古墳などが築造されるようになり、名島古墳からは三角縁九神三獸鏡・鉄劍、香住ヶ丘古墳からは三角縁二神二獸鏡、天神森古墳からは三角縁三神三獸鏡・盤龍鏡が出土し比較的大きな勢力を持った集団が存在していた事を示唆する。

香椎宮の創建された当時の古代に属する遺跡の存在は推定されているが、香椎平野内の古代の遺跡の発掘調査はこれまで行われていない。周辺地域では多々良川の対岸に、多々良遺跡、多々良込田遺跡などの調査が行われている。

中世期においては、香椎A遺跡群第1次・第2次調査、香椎B遺跡群の一連の調査において掘立柱建物群・屋敷群を検出し、10世紀から15世紀にかけての大規模な集落跡を調査している。特に香椎B遺跡群の調査においては大別して7時に分けられる区画溝・建物・掘立柱建物などの遺構群を検出しておらず、建物配置の時期的な変遷を追うことができる貴重な成果を挙げている。また香椎B遺跡の北側に隣接する城ノ越山では御飯ノ山城を調査し、これまで福岡市内において調査例の少なかった山城の全体構造を明らかにしただけでなく、生活空間と防御施設の関係を究明するための総合的な調査が行われた。これらの調査により、香椎平野における中世の様相は徐々にではあるが明らかにされつつある。

香椎A遺跡群調査一覧

調査字数	所 在 地	調査番号	調査期間	調査面積	報 告 書
第 1 次	東区香椎	8 4 5 1	19840430-19840531	600m <sup>2</sup>	第 491 集
第 2 次	東区香椎2078・2080・2081	9 1 3 5	19911105-19911227	788.61m <sup>2</sup>	第 317 集
第 3 次	東区香椎3丁目3番1号	9 8 2 1	19980701-19980806	493m <sup>2</sup>	第 622 集



Fig-1 周辺遺跡分布図 (1/2,500)

- 1. 香椎A遺跡
- 2. 御飯ノ山城
- 3. 香椎B遺跡
- 4. 香椎宮遺跡
- 5. 城ノ越城
- 6. 土井遺跡
- 7. 名子道古墳
- 8. 多々良大牟田遺跡
- 9. 多々良遺跡
- 10. 戸原麦尾遺跡
- 11. 戸原鹿田遺跡
- 12. 多々良込田遺跡
- 13. 天神森古墳
- 14. 胭塚古墳
- 15. 耳塚古墳
- 16. 舞松原古墳
- 17. 戸原王塚古墳

## 第二章 発掘の記録

### 1. 調査の概要

第3次調査地点は香椎A遺跡群の北端部、香椎宮の北側約500mに位置している。本調査地点の現状は病院の宿舎用地で過去の開発工事によって三段の平坦面に造成されている。調査は上側二段について行い、最下段は過去の造成時の盛り土であることから調査対象から除外した。これにより第3次調査では、開発申請面積967m<sup>2</sup>のうち、493m<sup>2</sup>について発掘調査を行った。なお、現地表面の標高は17.5m～18.5mを測る。発掘調査は試掘成果から現地表面は50cmほど掘り下げた赤褐色粘質土面を造構面として重機により表土掘削を行った後に着手した。調査を行った二段の平坦面のうち上段をA区、下段をB区と設定した。A区では一部が既存建物の基礎によって攪乱されていたが、多数の土坑・柱穴などが確認され、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての小堀古墳を一基、中世に属する掘立柱建物6棟以上を確認した。これら掘立柱建物群の主軸方向は大きく四方向に分けることができ、時期的な変化を考えることができよう。B区では造構面が大幅に地下げされており、溝状造構の底部と少数の柱穴が確認されただけであった。出土遺物は総量でコンテナ3箱を数えるが、遺存状態は良くない。本調査地点の東側では香椎B遺跡群の中世屋敷群と「御飯ノ山城」が調査されており、香椎A遺跡群において検出された該期の造構群も一連の造構群として捉えることができよう。

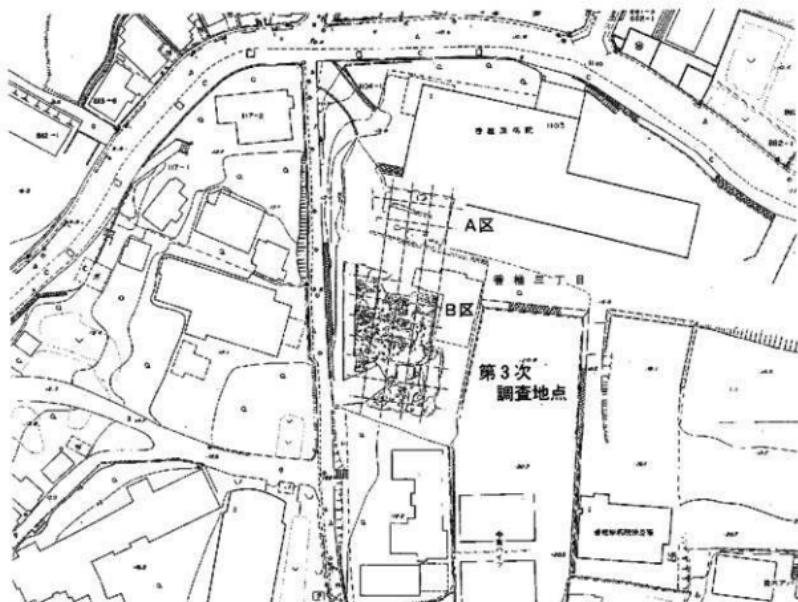


Fig-2 調査区位置図 (1/1000)



Fig-3 造構配図 (1/150)



Ph-1 調査区全景（B区）（北から）



Ph-2 調査区全景（A区）（西から）

## 2. 遺構と遺物

### (1) 弥生時代の遺構と遺物

これまでの香椎A遺跡群内の調査においては、弥生時代に属する遺構は検出・報告されておらず、第2次調査において弥生時代中期の鉢形土器が報告されているのみであった。第1次・第2次調査は、とともに丘陵の裾部から平地にかけての調査であり、古代から中世にかけて大幅な地形変更を受けていたものと思われる。香椎A遺跡群内の丘陵部の調査は本調査が始めてであり、古代以前の遺構の検出が期待された。本調査地点においては弥生時代終末期の時期に相当する小児壺棺が検出された。A区北端部において検出したこの遺構は、上部が他の中世の土坑に切られるが、平面形80cm×50cmの南北に長い楕円形を呈する(Fig 4)。土坑の深さは検出面から50cmを測る。土坑内には甕(Fig 5-2)が斜位に埋置され、上甕(Fig 5-1)の口縁部を打ち欠いて合わせ口とし蓋としていたと考えられる。下甕内には埋設後に上甕とともに落ち込んだとみられる子供の頭骨の礫が落ち込んでいた。下甕底部には内面より穿孔が施されていた。下甕口縁部横には、上甕の口縁部を打ち欠く時に使用されたと考えられる叩き石(Fig 5-3)が土坑の壁に立て掛けたような状態で検出された。調査区の基盤層となるバイラン土のため人骨の遺存は確認されなかった。

Fig-5 に出土遺物を示す。

1は弥生土器の甕である。上甕として使用されたもので、下甕の口縁内径に合わせるために頸部下より口縁部にかけて打ち欠かれている。頸部復元最大径は26.2cm、残存高は21.0cmを測る。底部は丸底でやや縦長の器形をもつ。外器面の底部付近は縦位の丁寧なナデ調整が施され、頸部には横位・斜位のハケ目調整が施される。内器面には縦位のハケ目調整が丁寧に施される。

2は弥生土器の甕である。下甕として使用されたもので、底部はやや丸みを帯び、底部中央に内面から焼成以前に穿孔が施される。上甕に比べてやや横広の器形をもち、復元口縁径は28.2cm、頸部最大径は26.0cm、器高23.9cmを測る。外器面口縁部は縦ハケ目調整を施したあと、横位のナデ調整を施す。頸部付近はハケ目調整を完全にナデ調整によってナデ消している。

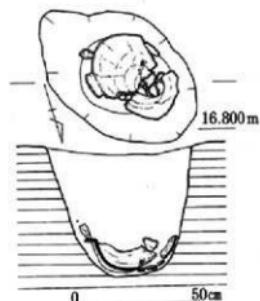


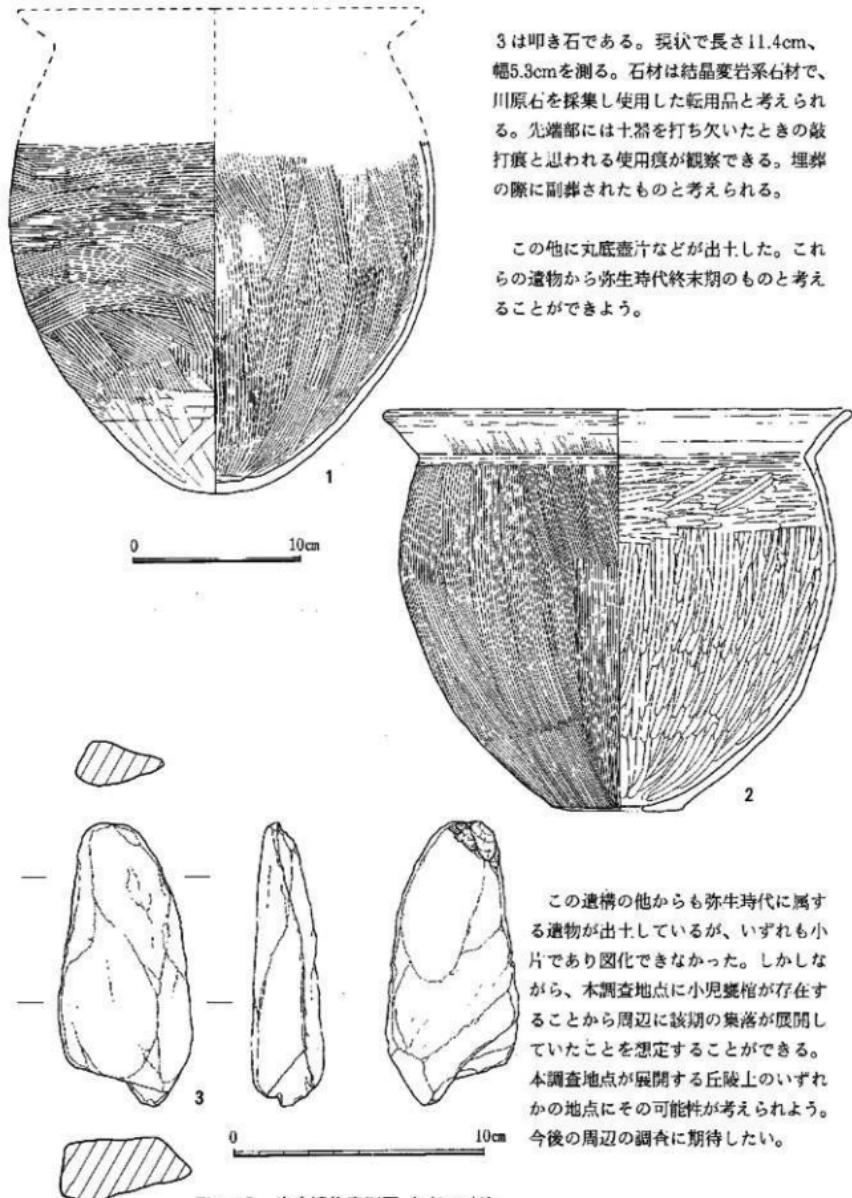
Fig-4 小児壺棺出土状況図  
(1/20)



Ph-3 小児壺棺出土状況（北から）



Ph-4 小児壺棺出土状況（南から）



3は叩き石である。現状で長さ11.4cm、幅5.3cmを測る。石材は結晶変岩系石材で、川原石を採集し使用した転用品と考えられる。先端部には土器を打ち欠いたときの敲打痕と思われる使用痕が観察できる。埋葬の際に副葬されたものと考えられる。

この他に丸底壺片などが出土した。これらの遺物から弥生時代終末期のものと考えることができよう。

Fig-5 出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

この遺構の他からも弥生時代に属する遺物が出土しているが、いずれも小片であり図化できなかった。しかしながら、本調査地点に小堀塚が存在することから周辺に該期の聚落が展開していたことを想定することができる。本調査地点が展開する丘陵上のいすれかの地点にその可能性が考えられよう。今後の周辺の調査に期待したい。

(2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構として溝状遺構一条と掘立柱建物9棟、多数の柱穴を検出した。検出した遺構の多くがA区のものであるが、B区も削平を受けていなければ、同様に検出されたものと考えられる。

(a) 溝状遺構

B区において検出した。削平によって底部付近のみが残存する。溝の方向はN-65°-Wで、幅80cm、検出面から深さ10cmを測る。遺物はわずかに出土したが、時期を比定できるものはなかった。

(b) 掘立柱建物

A区において9棟を検出した。それぞれの桁の主軸方向より大きく四時に分けることができる。これらの柱穴からはわずかに遺物の出土があったが、いずれも細片で時期の確定できないが、中世に属する掘立柱建物群であろう。以下に各掘立柱建物群(A~D群)の概要を述べる。

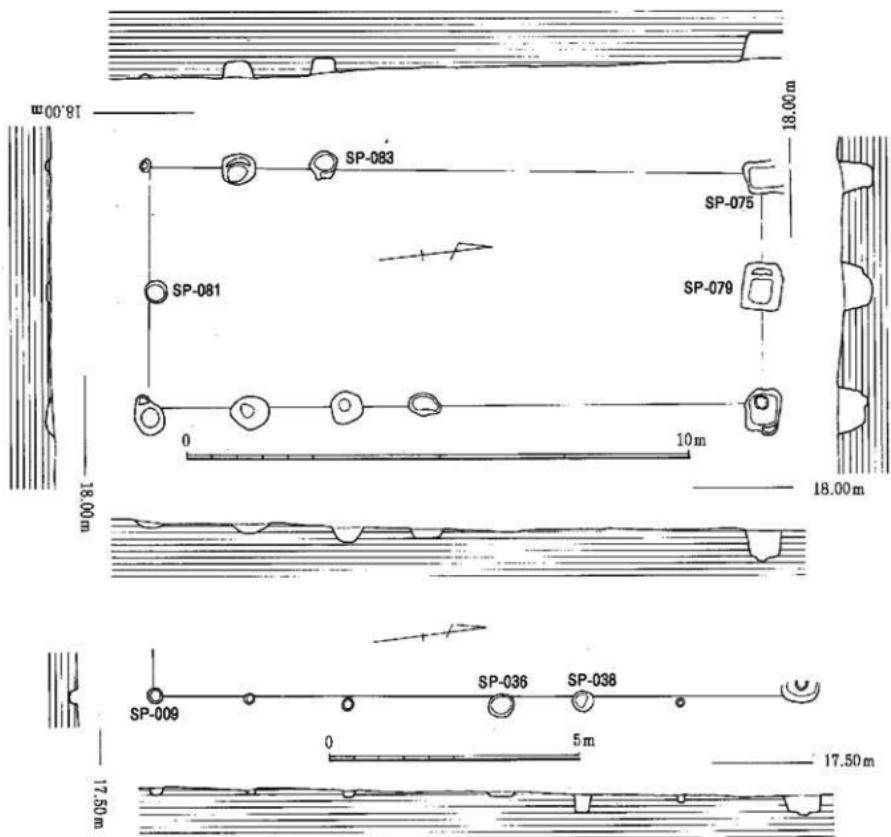


Fig-6 1号建物跡・2号建物跡実測図(1/100)

(一) 堀立柱建物A群(主軸方向はN-6.5~7.0°-Eをとる。1号・2号建物)

1号建物跡 (Fig 6、上段)

A区南側で検出した建物跡で、中央部を搅乱で失う。推定で桁行6間(3間)、梁間2間以上の建物である。北梁の柱穴列は他の柱穴と異なり、長方形の掘方で別の建物の柱穴とも考えられるが、同一方向をとるため、図上では建物の可能性の一つとして図化した。同一方向に並ぶ、または直交する二つの建物の可能性も考えられる。

2号建物跡 (Fig 6、下段)

A区西端部で検出した建物跡で、東桁のみ6間を確認した。柵列とも考えられるが、梁方向は調査区外へとのびるものと思われる。桁行の方向はN-7°-Eをとる。柱穴は深さ20~40cmを測る。

(二) 堀立柱建物B群(主軸方向はN-12~14°-Eをとる。3号・4号・5号建物)

3号建物跡 (Fig 7、上段)

A区西側で検出した建物跡である。推定で梁間2間、桁行4間の建物となり桁行の方向はN-12°-Eをとる。梁間全長4.4m、桁間全長9.6mを測り、面積約42.2m<sup>2</sup>となる。柱穴の掘方は円形または梢円形で20~60cmを測り、検出面からの深さは20cm前後を測る。

4号建物跡 (Fig 7、下段)

A区中央部で検出した建物跡で、梁間2間、桁行6間以上の側柱建物で西桁側に幅1間の庇がつく。3号建物と重複する。梁間全長3.6m、桁間全長10.2mを測り、面積36.7m<sup>2</sup>となる。柱穴はほぼ円形で、直径30~50cm検出面からの深さ20cm前後を測る。

5号建物跡 (Fig 8、上段)

A区南西部で検出した建物跡の一部である。現状で2間のみ検出したのみで、大半が調査区外へとのびる。これを梁方向とすれば、3号・4号と直交して建てられた建物とみることができる。柱穴の掘方は円形で直径40cm、検出面からの深さ50cm前後を測り、柱痕跡がみとめられる。

(三) 堀立柱建物C群(主軸方向はN-89°-Wをとる。6号・7号建物)

6号建物跡 (Fig 8、中段)

A区中央部南側で検出した建物跡である。南東部を搅乱され失うが、梁間1間、桁行2間以上の建物を想定することができる。現状で梁間2.2m、桁間4.2mを測る。柱穴の掘方は円形または梢円形で30~70cm、検出面からの深さ20cm前後を測り、遺構全体が大幅に削平されていることを示す。



Ph-5 1号建物検出状況(北から)

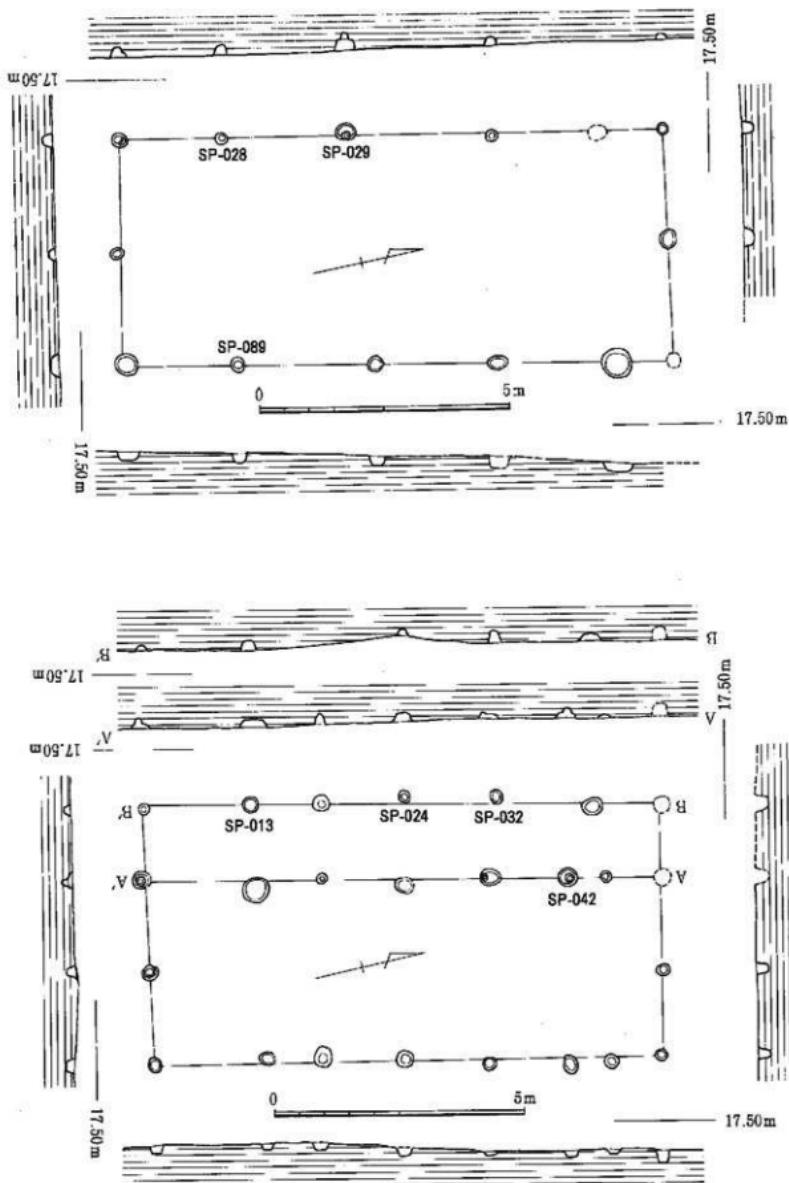


Fig. 7 3号建物跡・4号建物跡実測図 (1/100)

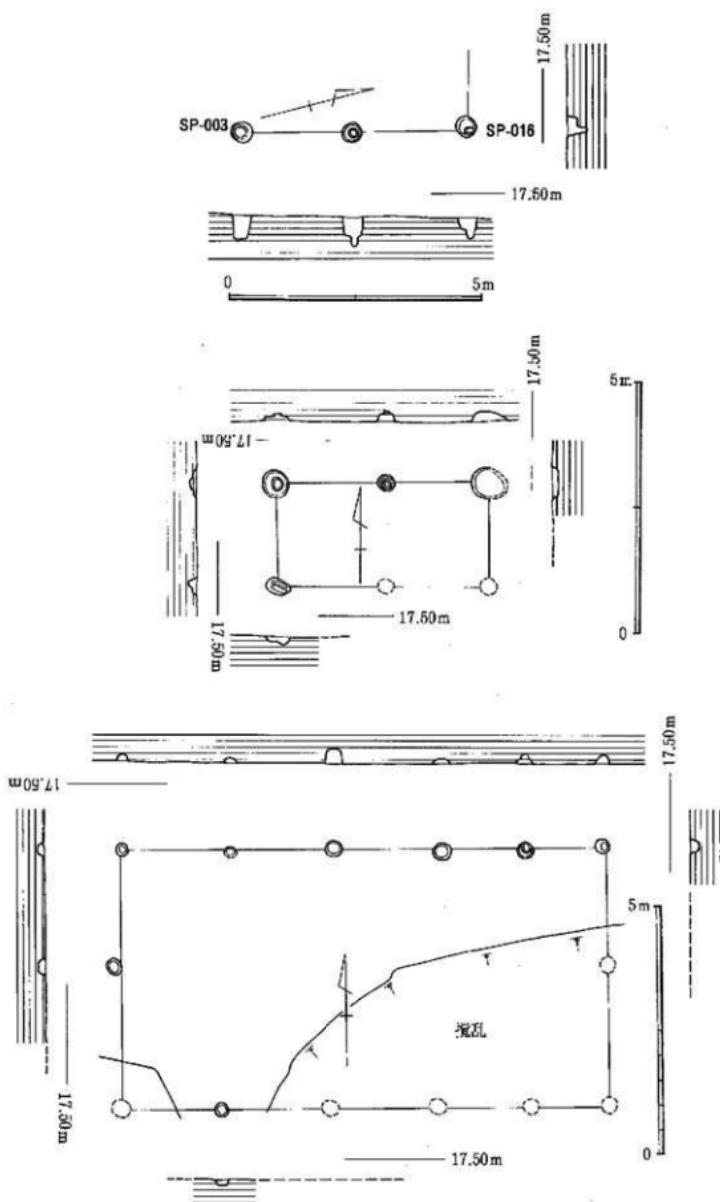


Fig-8 5号建物跡・6号建物跡・7号建物跡実測図 (1/100)

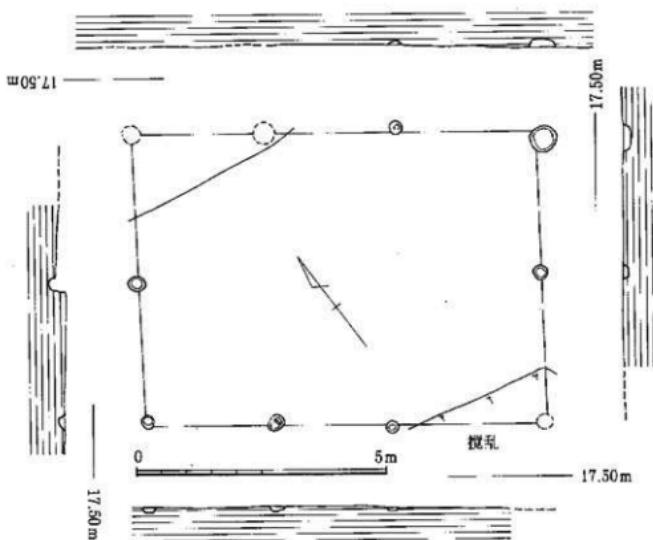
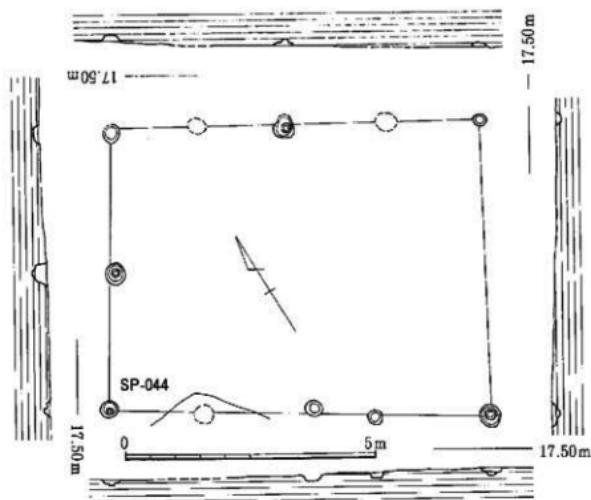


Fig-9 8号建物跡・9号建物跡実測図 (1/100)

#### 7号建物跡 (Fig 8、下段)

A区中央部南側で検出した建物跡である。南東部を搅乱で失い、南西部は調査区外となる。6号建物を開むように検出されたため同一建物の可能性も考えられたが、柱穴列が並ばないため別とした。現状で梁間2間、桁行5間の建物が想定でき、梁間全長5.2m、桁間全長9.6mを測る。柱穴の掘方は円形で直径30~40cm、検出面からの深さ20~30cmを測る。6号建物とともに桁行の方向はN-89°-Wをとり、ほぼ東西方向を向く。

(四) 挖立柱建物D群(主軸方向はN-55~57°-Wをとる。8号・9号建物)

#### 8号建物跡 (Fig 9、上段)

A区北側で検出した建物跡である。北隅部を搅乱で失い南隅部は調査区外へとびる。梁間2間、桁行3間の建物が想定され、梁間全長5.8m、桁間全長8mを復元できる。柱穴の掘方はほぼ円形で直径20~50cm、検出面からの深さ10~20cmを測る。

#### 9号建物跡 (Fig 9、下段)

A区北側にて検出した建物跡である。8号建物と重複する。南隅側を一部搅乱で失うが、梁間2間桁行5間の建物が想定され、梁間全長5.7m、桁間全長7.4mを復元できる。柱穴の掘方はほぼ円形で直径20~40cm、検出面からの深さ10~30cmを測る。8号・9号建物の梁間の柱間隔は他の建物に比べ大きく1間が約2.8mとなる。

以上9棟の建物跡の概要を説明したが、これらの柱穴から図化できる遺物の出土はなかった。遺構の年代としては中世に属するものと考えられる。また、この四群の建物の前後関係は柱穴の切り合いでからC群→D群→B群→A群という建て替えを復元することができる。また、B区において検出された溝は屋敷群前面の区画溝として捉えることもできよう。

#### (3) 出土遺物 (Fig 10~11)

遺物はコンテナ3箱分が出上した。ほとんどの遺物は小片であり、時期・器形の分かるものはすべて図化した。以下に遺構出土上の遺物を示す。

1は弥生土器壺の底部片である。SP-022より出土した。復元底径は5.4cmを測る。外壁面には縦位のハケ日調整、内面は指押さえで調整する。底部は平底で色調は褐色を呈する。弥生時代終末か。

2は上鉢器の小皿である。SP-030より出土した。底部は鋸切り調整とし全体はナデ調整で成形する。復元口径9.7cm、底径8.4cm、器高1.3cmを測る。

3は土器器の环である。SP-029より出土した。底部は摩滅のため判然としないが鋸切り調整とみられる。復元口径15.2cm、復元底径10.6cm、器高2.4cmを測る。色調は淡赤褐色を呈する。

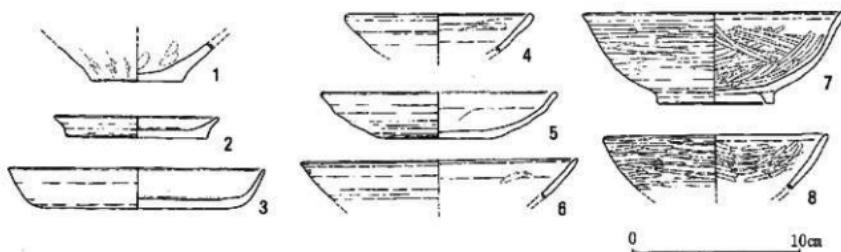


Fig-10 出土遺物実測図 2 (1/3)

4は土師器の小皿である。SP-026より出土した。復元口径11.2cm、残存高2.4cmを測る。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。内面にはわざわざに箒削りの痕跡がみられる。

5は土師器壺である。SP-021より出土した。底部は鉛切り調整しナデ調整を施す。復元口径14cm、復元底径7cm、器高2.8cmを測る。内面にはコテアテ成形時の調整痕が明瞭に観察される。色調は外面が淡赤褐色から褐色、内面が赤褐色から淡赤褐色を呈する。

6は土師器壺である。SP-062から出土した。復元口径16.4cmを測り、焼成は良好である。胎土は精緻で、色調は淡褐色を呈する。内面には箒ナデの痕跡が残る。

7は瓦器壺である。SK-002から出土した。口径15.8cm、底径7.0cm、器高5.4cmを測る。器面は摩滅しており遺存状態はよくない。外面には横位のヘラミガキ、内面には斜格子状のヘラミガキが施されている。

8は瓦器壺である。SP-090より出土した。復元口径13.0cm、残存高3.3cmを測る。外面には横位のヘラミガキ、内面には単位の細かい斜位のヘラミガキが丁寧に施されており、器面は銀化する。

9は白磁の碗である。SP-017より出土した。復元口径14.6cmを測る。口縁部はヘラによって外反する端部を造り出し、口縁部直下に段を持つ。釉調は乳白色を呈し、ピンホールが多く見られる。

10は白磁の碗である。SK-037より出土した。復元口径10.6cmを測る。口縁端部が水平に外反するVI類の白磁碗である。

11は青磁の小皿である。SK-037より出土した。いわゆる龍泉窯系青磁である。復元口径は9.8cmを測る。内面見込みには片切彫りによる柿描文が施されている。

12は白磁の碗の高台部片である。SP-042より出土した。復元高台径は7.2cmを測る。胴部下半部より露胎とする。釉調は乳白色を呈するが粗雑である。

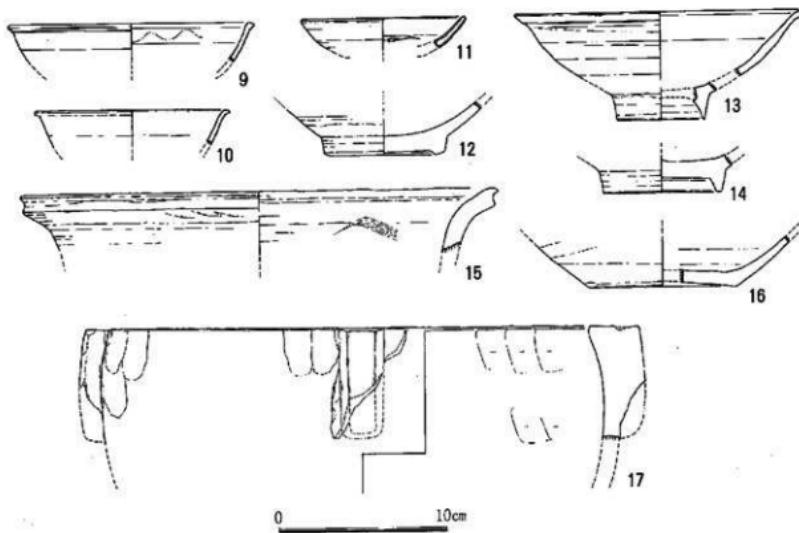


Fig-11 出土遺物実測図 (1/3)

13は白磁の碗である。SP-067より出土した。復元口径は17.2cm、高台径5.2cm、器高6.4cmを測る。口縁端部は水平に外反し、口縁部直下に段を有する。釉調は濁った乳白色を呈する。

14は白磁の碗の高台部片である。SK-037より出土した。復元高台径は7.0cmを測る。脣部下半より露胎とする。

15は瓦質土器の壺鉢の口縁部片である。SK-037より出土した。復元口径27.4cmを測る。内外面はヘラナデによって器底調整を施している。色調は灰褐色を呈する。

16は国産陶器の壺鉢の底部片である。SP-057より出土した。底部は窓切りした後に板目压痕が施されている。器底調整はヘラナデが多く用されている。

17は石鍋である。SP-092より出土した。復元口径は40.0cmを測る。断面が長方形を呈する瘤状把手が器面に削り出される。内外面に剥離痕が観察されるが、外面は縦方向の削りだしによって成形され、内面は横方向に連続して削りだし成形を行っていることが推定できる。

これら出土遺物は1を除いて、ほとんどのものが11世紀後半から13世紀前半にかけての時期のものとすることが可能である。この時期幅は獨立柱建物の四群に分けられる時期幅に対応するものと考えることができよう。

### 第三章　まとめ

以上、簡単ながら香椎A遺跡群第3次調査について概要を述べてきた。最後に調査の簡単なまとめと若干の問題点の指摘を試みたい。

本調査地点の遺構の初現は弥生時代終末期頃で、この時期に周辺一帯に集落が形成され、生活空間として利用されていたことは容易に推測されよう。本調査地点は丘陵の北斜面上に位置しており、開けた展望が望める地点であり、居住には適していたものと考えられる。次に遺構が見られるのは11世紀後半から13世紀前半にかけてであり、この時期には区画溝を前面にもつ整然と配置された屋敷群が少なくとも四時期にわたって存続する。この四群に分けられる建物の主軸方向には連続性は見られず、計画的な建て替えを連想させるものではなく、土地利用の一定期間の中断、もしくは屋敷群を構築した集団の入れ替わりを示すものであると考えられるが、今後更なる検討が必要であろう。

本調査地点の位置は香椎宮の北西約500mの地点で、10世紀から15世紀にかけての屋敷群を検出した香椎B遺跡群が展開する谷の入り口附近にあたる。本地点はこれらの遺構群とは丘陵の反対側に位置しており、同時代に属する期間はあるが、遺構の内容・密度・出土遺物を比較すると明らかな差異が見られ、B遺跡群の屋敷地に居住していた集団の下位集団の居住していた空間として捉えることができよう。これは可能性の一つであり、今後の調査によって明確されることに期待したい。

香椎 A 遺跡 2

-香椎 A 遺跡第 3 次調査概要-

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 622 集

2000 年 3 月 31 日発行

発 行 福岡市教育委員会

印 刷 松古堂印刷株